

交流サイト（SNS）にあふれる文字情報、テレビをつければ耳に入ってくる政治家の訴え。日々、多くの言葉にさらされ生きる私たちは、信じるに足るものはどれほどあるだろうか。論壇誌では、言葉や情報に関する論考が目についた。

京都大准教授の藤原辰史は「ちやぶ台2024年号」に「民と文字文化」を寄稿。文字文化を占有してきたエリートの言語が「無味乾燥なジャゴン」にあふれている中、「民がどうそのかわりに（文字文化を）構築し直していくのか」と問いかける。ジャゴンとは独特の専門用語、わけの分からない言葉、といった意味だ。

藤原は「エリートの言語に影響を受けない等身大の文字文化のまま水保病事件と対峙」し、「狂気の世界に接するほどまでに文字文化を練り」上げた作家石牟礼道子らの言葉の強靱さを挙げる。

一方で「エリート文化に十分に毒されてきた」自身を「民の声なき声を代弁す

10月 必要なのは「民」の語り

未来への責任果たすため

るなどうめばれて文字を書いた」と批判しながら、戦争を誰がいかに語るかという主題へと論を進める。

来年は戦後80年だが、藤原の射程はさらに長く、戦後100年となる2045年を見通し「必要とされているのは、戦勝国敗戦国関係なく、交戦国の犠牲者たちが連帯して語る戦争」、すなわち「民語り」を説く。この営みができなければ

「民の肉をひたすら挽くだけの戦争は残念ながら終わる気配さえないだろう」という藤原の警句を抱えながら、銃弾が飛び交う世界を見回した時に感じるどうしようもない絶望。まずはここから始めるしかないのか。

誰しもが親しんだであろう絵本について「ゲンロン17」に寄稿した愛知淑徳大准教授の阿部卓也。論考「絵本が登場するとき」で「世のほとんどの人にとって、絵本は全ての読書の起源そのもの」と定義した。絵本ブームの時代と言われる1960〜70年代は、

公害や環境汚染が最も深刻化し、安保闘争をはじめとする政治運動は激化、やがて暴力的かつ悲劇的な形で終わった、と阿部。

大企業や行政機関、学生といったエリートが描き出したそんな「メインストリートの歴史」に対し、子どもたちのため絵本を創り、届けてきた者たちの足跡とはどんなものだったのか。その時代、「誰が真に未来への責任を果たしてきたのか」と述べる阿部の視線は、民の言葉に光を見いだそうとする藤原と重なる。誰かが発し、漂う言葉や情報をどう捉えるか。物理

このほかの注目論考

「原子爆弾完成後の去就をめぐって」
（「現代思想」10月号）佐藤文隆・物理学者
原爆投下直前の米国の科学界や政治状況を、核兵器開発に携わっていたオッペンハイマーや彼を訪ねたポーア科学者の言動を紹介しながら記す

「差別・偏見のない共生社会の実現に向けてなすべきこと」
（「言論空間」2024秋号）藤木和子・弁護士・手話通訳士
最高裁が旧優生保護法を違憲とした判決について、原告側弁護団の一人として長期にわたった裁判に感じたつらさなど率直な思いも交えつづる

「『地面師たち』日本発の大勝負」
（「文芸春秋」11月号）
大根仁・演出家・映画監督、新庄耕・作家
ネットフリックスで配信されヒットしたドラマシリーズ「地面師たち」監督と原作者が制作過程を振り返りながら、さまざまな国の質の高い作品を日常的に視聴できる新たなエンターテインメント環境の魅力を語り合う

学者の須藤靖は「koto ba 2024年秋号」に「騙されないための科学」を寄せ、正しいことと間違ったことを明確に区別するのが困難な場合も「思考停止するべきではない」と訴える。偽情報が飛び交い、情報の渦から逃れることが難しい現代、「何にでも疑問をもち自分の頭でじっくり考えてから判断する態度」（須藤）の重要性がますます高まっている。

（敬称略）

神戸新聞2024年11月10日（日） 21面より（共同通信配信）

この記事は共同通信社の承諾を得て掲載しています。